

「癩癖談」に見る秋成精神

林 幸 美

はじめに

上田秋成といえ、必ずといってよいほど「雨月物語」「春雨物語」と結びつけて考えられる。文学史上読本作家としての地位が確立していることを表しているが、秋成という人物はそのイメージだけでははかりきれない広さと深さを持っている。著作も国学者としての古典研究の他、俳論、歌論、煎茶道書、紀行文、随筆と多岐にわたっているのである。その中で、「癩癖談」はその諷刺性という点に大きな特色がある。その冒頭第一段に次のように述べられている。

ひとごとひとつのくせとは。むかし／＼の諺ぞかし。今の世の人は。心辞のくせの外にも。たつに癖。居るにくせ。それにも。これにも。癖なきはあらぬを。(八七頁)

ここで述べられているように、「癩癖談」は世の中のさまざまな

癖を描いたという形をとっているが、その内容は社会に対する批判に満ち、毒舌・皮肉などの諷刺がきいているのである。「癩癖談」とは一体どういうジャンルの作品なのかはっきり定義することは難しい。あえていうならば諷刺的作品といえるが、諷刺という表現手段の性質上、作者の自己主張が強く打ち出されている。その秋成の物の見方・考え方などの精神を読みとるための要点になるのが、「癩癖」である。単なる性癖にとどまらないその意義を明らかにしていくことで、秋成精神が浮かび上がってくるに違いないと確信する。そこで以上の観点に立つて、「癩癖談」において「癩癖」の意味するところは何か、それが秋成文学の中にどのような位置づけられるのかを検討していきたい。

一

「癩癖談」の中心となるのは、何といってもさまざまなものに

対する批判が述べられている段である。毒舌・批評・あてこすりなどの諷刺がきいていて、辛辣・厳しさをきわめている。と同時に鋭い所を的確に突いて、現代にも通じる確固とした考えを打ち出している点も見逃すことができない。これらの段を、秋成の批判の筆の向けられた対象に絞って検討してみると、世間一般の風潮に対するものと、ある特定の身分や職業の人々に対するものとに分けて考えることができる。そこで、この二種について別々に内容を考察していく。

(一) 世間の風潮への批判

世間の風潮とは、世間に一般に行われていることや広まっている考え方などを指す。それらの風潮のあり方には、秋成が苦々しく感じ、がまんしきれずに痛烈な非難の刃を向けずにはいられないものが少なくない。

その最たるものは、第三段に取り上げられている流行への批判である。流行をすべてとするある人の意見への反論の形でなされたこの段は、どちらかといえばあまり世に容れられなかった秋成の自己の存在をかけた主張ではないだろうか。

世にはやるといふ事どもを見聞に。道々しきにも。芸能にも。よきことのみおこなはるゝにはあらで。おほかたがなしやすく。まなびやすき事の。まづはやるなりけり。さりとて。ま

た。あしきことのみ。おこなはるゝといふにはあらず。人のうたてが事。はたよしといふにもあらず。いたりてのわきは。まねやすからず。おこなひがたしとは。むかし／＼の人のいひぞかし。(九一頁)

流行の本質を言い当て、また秋成の最高のものを追求する理想をのぞかせた流行観である。先の流行イコール優れたものとする考えには憤りを覚えても、流行を頭から否定するようなことはしていない。しかし、根本的には流行ははかなく愚かなものと否定することは変わらず、儒者・僧侶・医者などの流行に乗りかかり世間に迎合した墮落に、批判の筆が次々とおろされていくのである。

そして、信心・迷信の流行の軽薄さや無価値を説き、人に惑わされて一時的に狂信する主体性のなさを厳しく批判している。また、衣服・髪飾りなどの移り変わりのところでは、現代にもそのままあてはまる鋭い指摘がなされている。それは、流行ばかりを追いつめて当世風に走るばかりでなく、流行に背を向けて排斥することさえも、結局は流行に翻弄されている以外の何物でもないというのである。つまり、それと気づかないうちに流行の中につかってしまうことが恐ろしいのであり、自分の足元を冷静に見つめ、本物を見抜くことがいかに難しいかを語っているのだと思う。これらの流行に対する秋成の考えは次の一文に集約される。

何事にもあれ。しばしはやりもてさわぐ事の。浅はかならぬはあらしものを。(一〇五頁)

怠惰に流れがちな人間の常を考えたとき、一過性と狂気を備えた流行とは、本質的なものを持たない不毛に過ぎない代物である。そしてこの段には、世に容れられなかった秋成の、真実なもの、本当に価値あるものを、見落としている世間に対するもどかしさもこめられていたのではないかと考える。

この他、世間の風潮に対する批判には、金万能の世の中、茶道の全盛、学者の貧乏とさまざまなものがある。それらに相通ずるのは、本質的内容や価値がなく、外形によって世間に評価されているものへの怒りが濃厚な点である。中身の薄い薄っぺらなものが堂々と通用している矛盾が許せない。そのものの内容のなさよりもむしろ、それを見抜く力を持たず、見抜こうとする努力・姿勢をも失った世間への憤りが、これらの批判の根底にあることを忘れてはならない。

(二) 特定の身分・職業への批判

ここで問題とする特定の身分・職業への批判というのは、(一)の世間の風潮に乗った厭うべき世相の代表格ともいえる人々を個別に批評している部分を指す。その段の主題となる批判よりは、細部で集中的になされた批判であるといえよう。

秋成の批判が向けられた対象の身分・職業がどのような傾向にあるのか考えてみると、儒者・僧侶・医者が多いことに気づく。

たとえば流行の愚かさを論じた第三段では、三者に対する非難は激しいものである。まず、儒者については、人格や学識の高い真の意味の学者が姿を消したことを嘆いている。学問の修養は二の次にして、詩文・書道・酒にうつつを抜かす俗物の門戸が賑わう矛盾、どこか世の中がまちがっているという思いを禁じ得ない秋成の筆調である。さらに、仏の道に精進して最も聖なる存在であるべき僧侶の墮落はひどく、言語道断というしかない。信者の機嫌をとり結ぶことが第一で、たいこもちと見まごうばかりに料理・茶をふるまい、人をそらさない術がものをいう。説経も経文の内容よりは、信者の興味を魅く節づくりに腐心しているのである。また、医者も同様で、繁盛する医者は患者の心を巧みにつかみ、仲人・茶器の売買・金貸しなどに懸命になっている。あきれるばかりのたくましさで本業以外に勤しむ姿がそこにはうけとられる。

要するに、本来学識と人格の高さを誇り、人々の尊敬を得るべき立場の三者が、墮落・俗化して世間に迎合しているあさましさに秋成は目を向けているのである。そうでもしなければ生きていけない世の中で、生活の知恵・世間遊泳術であるのだと、矛盾を感じながらも是認しなければならぬのかもしれない。しかし、

本物指向の秋成には、卑屈に下落した精神の貧しさを目の当りにして、必要悪であると納得することはできなかったに違いない。

三者への激しい非難がそれを物語っている。

また、これらの批判と系統を別にするものとして遊女への批判がある。秋成は第二十三段で遊女論を展開し、二つのタイプの遊女について評している。一方の遊女は、全盛の身を鼻にかけて自分中心に好きなように振るまったために、せっかくなんだ幸せも逃して遊女に逆戻りしてしまう。そして落ちぶれ果てても、どこまでも厚かましく男に媚を売る姿に、どんな境遇になってもそれに順応し、したたかに生き抜く強さが表れている。遊女根性でもいえるしぶとさが、輝くばかりの美しさの陰に隠れている事実には不気味さまで感じるのである。また、もう一方の遊女は、謙虚な心がけで何よりも心の堅実さを重く見て、しっかりした人の妻としての地位を得るのだが、苦界から抜け出るために打算的に生きている面があることも見逃してはいけない。

この他、秋成が遊女の母親に視点をあてて批判しているところがある。自分ではろくに育てもせずに遊里に入れ、娘が全盛になるとその恩恵に浴して生活する母親への批判は厳しい。それゆえ、娘が落ちぶれてきたときの母親の惨めさには、娘を食い物にしてきた報いとばかりに一片の同情も与えていないのもうなずけるの

である。結局、秋成は遊女の本性を、

さるものゝ。時めけるには。海道の馬子。あるは。人のひまうかゝふ小盗人等にひとしく。かやかくして。おしとりし物のかぎり。わけなくつかひすてゝ。またも得んとおもふなりけり。(一七六頁)

とかなり否定的にとらえているのである。

これらの遊女に対する批判と密接な関連を持っているものに、第二十四段に述べられている幫間をはじめとした芸人批判がある。幫間とは、遊興の場で人の心をそらさずにその場の雰囲気盛り上げるものである。昔はその本分に徹し、席に連なる人々の心をひきつけることにひたすら努める者がいたが、今ではひとりよがり騒ぐことが芸と心得違いをしている者ばかりになってしまった。そして、利欲をたくましくして、老後のために小金を貯めてむことに懸命なのである。生活の臭いを感じさせないのが遊里に生きる者の身上ではないか。それを一夜の宴に咲く徒花となることを潔しとしない不粹さが、彼らの間に広まっている事実を秋成は嘆いているのである。結局、通も粹ももう存在せず、遊里の美意識は失われてしまった。その原因を彼ら芸人の俗物根性や野暮さに求め、怒りを爆発させているためにこの部分の調子が激しくなっているのである。

さて、医者・儒者・僧侶・遊女・芸人と秋成のすさまじい批判の刃がおろされた対象を見てきた。秋成の非難の対象は多岐にわたっているが、武士はもちろん農民・職人・商人などのいわゆる士農工商の枠組には属していない。むしろ、それからはずれた身分帰属のあいまいな遊民的存在である。対象をさらに整理すると、儒者・僧侶・医者と遊女の二つに絞られてくる。これらに対する批評が多く、かつ厳しいことは、秋成の諷刺の方向を示していると考えられる。遊女は当時の女性の職業としてほとんど唯一のものであるという観点から除外すると、前三者が身分制度の例外的存在であっても、相当社会的に占める位置が高いことは明らかである。だが、秋成は社会的に身分が高い遊民階級だから、彼らに批判の目を向けたのではない。むしろ多分に個人的で、癢にさわるもの、憤りを感じるものについて筆を走らせた結果、儒者・僧侶・医者に関するものが多かったというほうがあっているのかもしれない。それとても偶然ではなく、学問・徳・技術を身につけてそれ相当の人格を有しているべき人々の実体が、腐敗したものであるという社会的背景に裏づけられていることを忘れてはならない。同時に、中村幸彦氏の研究にあるように、^{注1}「癩癥談」に多くのモデルが存在するということから、特定の身分・職業への批判の中身は、秋成の氣に入らない世間の風潮の中の、特に目立

つ実在の人物に焦点をあてて一般的な話として描いたものともいえるのである。このように考えたとき、秋成の生きる世界が大きな意味を持つてくる。秋成も国学者として学問の世界に身を置き、また医業に携わっていた。それだけに、同じ範疇に生きる人々の生活はよく見え、自分もそこに属しているために憤りの気持ちも強いといえよう。さまざまな人々を広くかつ鋭く見つめている秋成の意識が強くひきつけられたところが、自分も含めた儒者・僧侶・医者の世界であり、そのため他に比べて鋭く切り込んでいるのが特徴となっている。

一方、遊女については、若き日の放蕩時代の経験と友人・知人からの伝聞に基づくものと推測される。当時の社会において、男の妻や娘としてしか認識されなかった女性の中で、遊里という特殊世界の中ではあるが、自己を表に押し出す機会を与えられていたのが遊女である。そのために批判の対象たりえたともいえるが、秋成の遊女批判には、遊里の美意識・理想に対する幻滅が色濃く見てとれる。芸人批判にも同じことがいえるが、「昔はよかった」的な老人の懐古趣味とも受けとられがちな表現が随所にある。だが、一見華やかな表面とは裏腹な陰の醜い本性を知り、江戸文化の一つの中心である遊里の地盤沈下に対する哀しみと憤りが、遊里を代表する遊女への批判という形をとって表れたと考えたい。

（三）その他

「癩癖談」は、先に述べたように世間や儒者・僧侶・医者・遊女などに対する批判を主にした段が中心となって構成されているが、それとは趣きを異にする段も少なくない。

第一に、優れに写生文で「癩癖談」中の名文であるといわれている第二十二段は、特異な例外的存在である。全体の構成は、書き出しの部分に「伊勢物語」の影響が色濃く見られ、雅から俗への逆転というパロディ的性格を有している。しかし、この段の主眼は後半の貧民街の描写にあって、直接的な批評・毒舌を避け、そこに生きる貧しい人々の姿をリアルに描いたものは、やはり名文の名に値すると思う。貧しいながらも、世間の矛盾になどこだわらずに力強く生活している人々に、同情の底にあこがれと共感をもって接し、一貫して暖かい目を注いでいる点が特徴的である。さらに細かい事物や微妙な表情を至近距離から描く方法の上に、立脚点は自分の属する世界に置いて上から眺めるという鳥瞰図的構造が重ねられている点に注目したい。この秋成意識の二重構造とでもいうものが、確かな写実に支えられた世界を繰り広げたいえる。第二十二段が「伊勢物語」のパロディとして単純に片付けられず、写生文として独自の位置を保っている理由がここにあるのではないだろうか。

第二に、物語的段である第十一段・第十三段・第二十段・第二十一段は、「伊勢物語」のパロディとしての性格が色濃く、短いながらもストーリーがはっきりし、一貫した物語となっている。これらの段は、例外なく「伊勢物語」の影響を強く受けている。全体の構成を借りながら細部の表現を卑俗にすることでイメージの逆転を図るもの、逆に細かい表現の借用から全体のイメージ・構図を「伊勢物語」に重ね合わせ、内容の次元の違いで原典との距離を際立たせるものなど、その方法は様々である。しかし、いずれにしても「伊勢物語」に描かれた平安朝の雅びの恋を、近世の遊里・生活の場にひきずり降ろし、平安朝とは異なる一種の美意識さえ体現している近世の男女の姿を浮かび上がらせていることは確かである。人間のあさましさやうそを軽い笑いに浄化させてしまうユーモアを持った俗の恋愛遊戯は、平安朝の雅の恋愛に對置される。やはり雅と俗の対比が問題なのである。諷刺の一手段であるパロディによって、男女のあり方という現実社会の一面を明らかにした点は、「癩癖談」の諷刺の一方として意義があると思う。

第三は、第十四段である。西鶴の「好色一代女」を思わせる小説風の段で、秋成の初期の作品である「諸道聴耳世間猿」「世間妾形氣」（以下それぞれを「世間猿」「妾形氣」と略す）の浮世

草子の系譜をひいていると思われる。人並はずれた教養を身につけ、また思い込むとそれ一途になってしまう偏執的性格をもった主人公の妾の変転を中心に、彼女をとりまく類型的に描かれた人々とが、女の一代記風に完結した話としてうまくとりまとめられている。一方、秋成も細かい部分では鋭い批判の目をきかせているが、主人公の風流女に対しては冷たくつき離しているように思えない。読み手の受け取り方にある程度まかせ、変転の原因を女自身の内面に求めながらも、周囲の人間に翻弄されたという解釈の幅をもたせているのである。

以上の諸段に共通しているのは、作者秋成の直接的非難や厳しい批判・毒舌が姿を消していることである。貧民街の生活、近世の男女のユーモラスなあり方、風流女の流転の人生をさらりと描いているといえる。パロディの手法を取り入れたり、細部にきざりと皮肉をきかせたりと、諷刺という点では十分意味がある。むしろ、さらりとした描写が、主流となる段の強烈な批判などと対照的な味わいを出している。緩急自在な秋成の筆が生き、「癩癖談」を変化に富んだ作品にしたように思えるのである。

もう一度「癩癖談」の諷刺を振りかえってみる。主流となる厳しい批判を中心とする段を、(一)世間の風潮への批判、(二)特定身分・職業への批判の二つに分けて考えたが、結局この両者は表裏一

体となっている。つまり、(一)が秋成の内面にある世間というもののとらえ方であり、その傾向が顕著な代表者ともいえるべき(二)が深く掘り下げられているのである。この傾向は、(三)の第二十二段のところでも述べた秋成の視点の至近と鳥瞰の二重構造と関連がないだろうか。世間に広まっている風潮やそれに染まりきっている多くの人々を、実にさまざまな角度から批判を与えている点は鳥瞰図的構造を持っていると考えられる。そしてその中の特定な部分の人々を取り上げ、鋭く切り込んでいるところは至近的描写に含まれる。また、自分の世界という確かな立脚点から批評を行っているのも鳥瞰図的構造の一要素を満たしているといえるのである。この精神の二重構造は、秋成の鋭い観察力と判断基準、巧みな表現力と相まって、とかく独善的になりがちな批評・諷刺を複雑で厚みのあるものになっている。そして、(三)のように少し特色の違う世界を生み、「癩癖談」の幅を広げる役目を果たしたのだと思う。

二

以上、「癩癖談」の各段について、諷刺の方向性に力点を置きながら内容検討を行った。その結果、世間の風潮に対する嫌悪を前提にし、その傾向の最も顕著な人々を糾弾していく直接的批判と、写生やユーモアの陰に込めた間接的批判との二つの流れを指

摘できる。しかし、これらは単純に分けて考えられるわけではなく、密接に関係し合い、不可分な要素を備えているといえる。この両者を貫き、連結器の役目を果たしているのが「癩癧」であり、それは第二十五段に全体の集約という形で表れている。実質的な序であるところの第一段には「癩癧談」の著作態度が語られているが、「癩癧」が大きなテーマであり、その多重的意義の理解が「癩癧談」の把握であると考えられる。そこで、このような観点から第二十五段の「癩癧」の位置づけを明らかにすることで、秋成の自己把握を含めた物の見方を検討していきたい。

第二十五段は他の段と異なり、駒鳥と鷺の会話に託して自己分析・批判を行うという方法をとっている。作者秋成が強く投影された駒鳥がやはり秋成とおぼしき隠棲者を徹底的に叩く方向で話は進められていく。

はるごとに。此いほに来てあそぶに。このあるじは。何をわたらひにするともなき。いたづら人なり。かくても。世にすむかひありや。いとにくむべきものなり。(一八八頁)

なまけ者で、この世に存在する価値のない屑であるかのように決めつける調子は一貫して変わらず、その内容が一つずつ明らかにされるのがこの段のあらましである。

一方の鷺は、駒鳥の辛辣さとは逆に隠棲者をかばうかのように

その性格を描き出している。特徴として、世の中の悪や虚偽を許容できない潔癖性、古代への憧憬とそれに伴う現代蔑視があげられる。しかし、この二つは結局、要領よく巧みに世をわたることのできない損な隠棲者の性格の異なる一面に他ならない。生きていくためには、正義だけでは通用せず、悪や矛盾をそれなりに納得して必要悪ぐらいに考える度量の広さがあるであろう。それほど大げさに考えずとも、普通の人が自然にしていることができないということは、隠棲者の心の狭さが原因で社会への不適応をおこしているのである。本人の性格上どうにもならないことながら、あたかも自ら苦しみを求めているかのような姿にうぐいすの同情も寄せられている。

しかし、それも駒鳥にとってはおごり以外の何物でもなく、このおごりの意味の解明が第二十五段の中心である。おごりとは当然ながら精神的レベルの問題で、衣食住などの物質とは異なるため、隠棲者の清貧とも思える生活も問題外となる。

あるじは世にいふ。癩癧のやまひをつのらして。え養はぬおろかさより。我をたふとしとはおもひあがらねど。世の人はみなにぐれるものにする。こゝろ奢のひとなり。(一九二頁)

自分以外の世の中全部の人が醜く汚れきっているという見方は、心の狭さと心の贅り、すなわち贅沢であるといっている。つきつ

めて考えれば、自分を他より優れているとする思い上がりと同等で、他を蔑むことは相対的に自己を引き上げるのと大差ないのである。それは癩癧の病をつのらせての愚かさゆえと、相当な癩癧性であった秋成の姿がここにも投影している。

世の中は、定規で測ったように割りきれものではない。それゆえ周囲の状況に応じて臨機応変に適応していくことは、墮落ではなくてむしろ柔軟性のある生き方である。ときには世の中の悪や矛盾に真っ向から立ち向かうよりも、自分自身の正当性を保持しつつ、状況を静観することも大切ではないか。

世におしたてられても。おのれ濁らぬはまづよしといへり。
それも表面をにがらされば、世にはまじはりがたし。(一九

三頁)

この文にはそのあたりの処世術が語られている。自分自身は濁らず、それでいて表面濁ったようなふりをして矛盾だらけの世に交っていく。けっして楽なことではなく、それ相応の覚悟と達観なくしては実現できない生き方といえる。駒鳥の展開する論は世の中を生き抜いていくバイタリティと説得力にあふれ、屈原の「漁父の辞」の現実的的人生観とオーバーラップするものである。

ところがこの隠棲者にはそれができず、ただ世のあり様であると素直に受けとればいいものを墮落だと嫌悪するしかない。ここ

が違うあそこが良くないと、いちいち言いたてるのは、「我がしこのころおぐり」で、すなわち、自分は賢い、愚劣な人間とは違うのだという慢心がすべての原因である。だから、まずい物を食べ、薄い着物を着る質素な生活も、贅沢を慎しむ殊勝な心がけとは程遠い貧乏ゆえのやむを得ない生き方だと、駒鳥の舌鋒は最後までその厳しさを緩めていない。

以上が第二十五段の駒鳥の論を中心にした概観である。ここに描かれた隠棲者は先に述べたように作者自身と思われる。また厳しく批判する駒鳥の視点は当然作者のもので、つまり自分で自分を鋭く見つめるという構図の成立は否定できない。そこで、秋成の自己分析とはいかなるものであるかを整理してみよう。まず最も強く感じられるのは、世間の矛盾や俗悪な変化が見えすぎる苦悩である。鋭敏な神経には、それらが見えすぎるほど見え、癩にさわる。しかし、世の大勢として自らの力ではどうにもできない無力感によけい苛立つ姿がそこにはある。このあたりの事情を三沢淳治郎氏は次のように述べている。

本書の序段にもある通り、癩癧、いわゆる気まま病で、おのれの理想と合致せぬ社会の諸相に我慢のならぬ一種の性癖である。自ら進んでこれを改善しようという意気もなく、責任も感ぜず、ただ世相の転々として俗悪にうつって行くのを、

あきらめ切れずに業を煮やす。従って、自分は自然に社会とかけ離れて、敬遠され、冷遇を受け、益々煩悶の末は自らそこなうに至るのが常である。宿命を知り、変転の理をあきらめ、大乘の妙趣にめざめ、在るがままなる世相を觀するまでには、まだまだ数十歩の差がある連中なのである。（「講座

くせものがたり贅注（4）^{注2}）

性癖としての「癩癖」についての叙述であるが、第二十五段における秋成自身にそのままではめて考えることができると思う。

つまり、「癩癖」とは単なる性癖にとどまらない、秋成自身ともいえる個人の内奥を指すことばといえるのである。世間の矛盾が見えすぎるための苦悩、さりとて大局に立っての諦観・悟りに到達するまでには至っていない。無知と達観の狭間に位置して自身自身のあり方に苦悩し、揺れ動いている姿が秋成のとらえた自己であり、また「癩癖」の性質の一面であると考えられる。

秋成自身、こうして癩癖をつのらせていく自己をけっしてよいものとは考えていない。それだからこそ、駒鳥にかつてない辛辣さでこきおろさせ、ひいては代表格の自分も含めた「癩癖」をもつ人々を描いて批判する「癩癖談」を著したのである。憤りをまき散らし、毒舌を吐くことが、ますます世間を狭め生きる場を限定させていることを、秋成ほどの人がわからないはずがない。し

かし、どうしてもがまんできず、癩癖を抑えることができない原因を「心おごり」に持っていていっているのである。

駒鳥のいう「心おごり」には、奢りと驕りの二つの漢字が与えられ、分に過ぎた贅沢と高ぶった傲慢さを兼ね備えている。自身自身は世間の汚濁に染まらず、清澄で崇高な精神を持ちながら純粹性を保ち続けているという自負は、傲慢な思い上がりであると同時に、自己の精神を聖域に置く精神的贅沢でもあるということであろう。この二義性をもった「心おごり」はとりもなおさず「癩癖」である。世間への不満の奥底にある一種の偏向性を持った性格の一端を示し、また癩癖症という病気の根源的原因ともなる。この複雑な意味を持つ「癩癖」が、癩癖をつのらせ不満を爆発させていく秋成を生み、そしてその姿をしつかり見つめて描き出すことのできる秋成をつくったのではないだろうか。

このように第二十五段では、秋成自身の姿が描かれているわけであるが、今まで外に向けられていた批評の目を、自己の内部に向けている点に注目したい。社会のさまざまな状況やそこに生きる人々に対していわば外に開かれていたものが、一転して厳しい自己批判・自己分析に変わったのである。外の世界に対しても的確な見方と容赦のない厳しい筆がふるわれていたが、それにもまして自己には厳しい辛辣さが満ちている。内・外の区別もなく、

例外的部分の存在が許されないのが秋成の批評なのである。これは、世に容れられず自分の力を存分に發揮できないひがみや鬱憤晴らし、ひいては世間に対する八つ当たりだけでは済まされない、もっと公平な性格を秋成の批評が有しているからではないか。世間の矛盾が見えすぎると述べたが、それは癩癥症ゆえだけではなく、確かな批判能力と冷静で的確な観察力を秋成は備えていることを表している。

だが、もしこれだけならば「癩癥談」は社会評論であり、諷刺文学とはならなかった。諷刺の味わいを持ち合わせているためには、これに加味する何かがなくてはならない。それが批判の基準となるものの性格である。秋成が世間を見る場合、昔からあるべき姿・秩序・本分からの逸脱やそれらの崩壊を、俗悪であり墮落の進行であるとする彼独自の内部的な思想・規範はあったであろう。しかし、それらは自己中心的で気ままな一面を持ち、感情的嫌悪が主であったように思う。そこがあくまでも冷静で客観的であるべき評論と一線を画し、「癩癥談」に一步踏み込んだ激しさを感じさせる要因である。内部規範は感情に置き、批判する態度・方法は合理的という、一見矛盾するものが見事に秋成の中で融合し諷刺手法を形成している。このアンバランスな統一の状況が、やはり「癩癥」の本質の一面であり、それだからこそ第二十四段

まで他を批判してきた自己をも鋭く批判できたといえる。自分をも例外とせず批判の対象とする「癩癥」は、全体の原点・中核として諷刺の牙えを生み出してきたのではないだろうか。

そして、動物仮託もまた第二十五段にとって大きな意味を持っている。人間以外の者の論議に作者の主張を強く移入させる方法は他の段には見られず、第二十五段独自のものである。この手法は高田衛氏の指摘にもあるように、やはり秋成の作品である「暁時雨」^{注4}に見られ、両者の構成は酷似している。また内容的にも、清濁合わせ飲む度量を持たない秋成が浮かび上がり、それを批判する論調も相通ずる。

この人間以外の者に仮託して自己批判を行わせる手法は、何といても客観性という点で大きな効果をあげている。自分が自分を批判するという構図の抵抗感を避け、動物達にかなり自由に語らせることができるうえ、その視点も一步離れた所において冷静に観察している印象を与える。この客観性の効果は自己批判的確さを裏づけるもので、自己への冷笑・罵倒をきわめて有効に行う助ともいえる。現実社会とぎりぎりの対応をし、その諸様相を非難してきたものから、自己の内面へと意識が転換するとき、動物仮託すなわち擬人法はその間に存在する軌轢を解消せしめ、スムーズに自己批判を行わしめたのである。

二つの意味を含んで内容のふくらんだ「心おごり」ゆえの現実と自己との葛藤、そして外の世界だけでなく内にも向けられる批評の性質が秋成の「癩癧」の大きな柱である。それが動物仮託という手段で、痛烈な自己批判・自己分析となったのが第二十五段である。そこには秋成の行う社会批判の根本的態度、つまり秋成の世間を見る姿勢が示されている。すなわち、第二十五段は、「癩癧談」全体の中心テーマである「癩癧」の根源的意味が示されている点では出発点である。と同時に批判する自己を徹底的に解明するという外に向けてなされた批評を内に対してもする点では、全体の批評の総括ともいえる重要な段である。

三

秋成の作品には批評・諷刺を主にした流れがある。最晩年の「胆大小心録」は言いたい放題の毒舌で有名であるし、近年評価の高まってきている初期の浮世草子「世間猿」「妾形気」はあてこすりや実在の人物の権威をひきずり降ろすような表現が多い。「癩癧談」もその内容からはこの流れの中に入ると考えられるが、その場合「世間猿」「妾形気」とのつながりには注目すべきものがある。「世間猿」「妾形気」は末流ながら八文字屋本の系統に属し、秋成の独自性は出ているが気質物のジャンルに入る。そこ

ではテーマとなっている「気質」が問題となるのである。「癩癧談」において「癩癧」が重要な意味を持つことを述べてきたが、この「癩癧」と「気質」は一見根本的には同じことばのように思える。しかし、本質的には両者が同じでないことは「癩癧談」が気質物ではなく、諷刺的作品としての独自の位置を築いたことからうかがえる。批評・諷刺の秋成作品の流れの中で、「世間猿」「妾形気」から「癩癧談」に、何が受け継がれ何が捨棄されたのか、「癩癧」と「気質」を中心に考えてみる。

「癩癧談」と「世間猿」「妾形気」の間には類似点が見出せる。第一は、作者の目が身分・職業が明確なものに向けられていることである。しかし、両者ともある身分・職業の人間の本来あるべき姿の反対の極、すなわち著しく逸脱した姿を描いている点に注目したい。というのは、一般に気質物といえ、ある身分・職業の人々に共通する性格・趣味などが類型的にとらえられていると思いがちである。だが、気質物とは本来逸脱や偏向を描いたもので、^{注5} 平凡な普通人では話にならないのかもしれない。「癩癧談」においても、分を越えた行為に秋成の批評が容赦なくなされたことを考えると、この点には意味があると思う。

第二に、モデルの問題がある。「癩癧談」の批判の対象に実在の人物がいることは森川竹窓の書簡から明らかである。^{注6} 一方「世

「間猿」「妾形氣」も名前のもじりなどからモデルの存在が浮かび上がってくる。実在の人物を明確にしていくことは困難であるが、中村幸彦氏は「癩癖談」に描かれた人々^{注7}」「秋成に描かれた人々^{注8}」(一)で詳しく論じておられる。それによると、秋成は単なる思いつきで話題を取り入れたのではなく、かなり丹念に注意深い配慮をもって描写していることがわかる。

このように実在の人物をモデルにして作品化することについて、「世間猿」「妾形氣」などの秋成の氣質物においては大きな意味がある。というのは、普通氣質物というのは、特定の個人に対するあてこすりが主題ではないはずである。ある身分・職業を一つにくくり、そこから描出される性癖等を描くのが一般的といえる。それが、多少ばかすことはしても、読者に対して実在の人物をそれとわかるように示し、モデルに対するあてこすりや権威をひきずり降ろす方向に秋成の筆は動いている。これが氣質物の枠内におさまりきれなかった秋成の諷刺性で、「癩癖談」に引き継がれていくのである。また、モデル使用による創作を中国小説の翻案と同じ態度と見^{注10}、秋成の癖と^{注11}とる考えも方ある。それが癖ならば、「癩癖談」にもそのまま踏襲された創作姿勢である。

実在の人物によってそこを窓口にして広く社会の諸相を見るか、または社会現象の縮図をその人物に見出すかのどちらかの態度が

「癩癖談」にはある。秋成の視野は広く、社会のすみずみにまで目が向けられているが、その見方には秋成独自の特殊性を含んでいる。普通の人が見落しがちな平凡なことに問題意識を持っているからである。その結果鋭く深い観察が可能になり、世間・社会に對峙する姿勢の表れとなったのではないだろうか。

次に「癩癖談」と「世間猿」「妾形氣」との間に存在する相違点を考えてみたい。まず「癩癖談」は二・三の例外を除くと一段が非常に短くなっている。これは創作としてのストーリー性が希薄になり、随筆の方向に進んでいることと深い関わりがある。作者の生の感慨の叙述に、社会諷刺や毒舌が発揮されているのではないだろうか。この傾向は「世間猿」「妾形氣」との関係より、「胆大小心録」への移行を示唆していると考えられる。「胆大小心録」は随筆という表現形式のもと、諷刺より一步踏み込んだストリートな社会批判等を行っている。ストーリー性の希薄化とそれに伴う随筆への傾斜は、秋成内部に世間との相克感が増大し、その外部への噴出の氣運が高まっていくことにはかならないのである。

また、「癩癖談」における匿名性も秋成初期浮世草子と異なる点である。「世間猿」「妾形氣」では、登場人物の名前がモデルとなった実在の人物の名のもじりであることが多い。それによっ

てあてこすりや皮肉から生まれる笑いがあり、読者もモデル穿鑿の楽しみを従来の気質物に付加して享受したであろう。これに対して「癩癧談」の各段は、「むかし……ありけり」で始まっていて登場人物への命名がされていない。その理由としては二つ考えられる。一つは一人の主人公を特定しなくてもよいほどストーリー性が希薄で短いためである。もう一つは、題名や構想・文章などを取り入れた「伊勢物語」の影響である。在原業平の影が全体を覆っていても「ある男」のエピソードの連合である「伊勢物語」の匿名性に倣っているのではないか。そして「むかし……ありけり」の表現は、「世間猿」「妾形氣」に比べて批判性の強まった「癩癧談」にとって、実在の人物批判の隠れ蓑として便利であったことを忘れてはならない。

秋成の批評・諷刺作品の流れの中で、「癩癧談」と「世間猿」「妾形氣」を比較検討したが、一体「癩癧」と「気質」とはどう違うのであろうか。そこで原点に戻って辞書的意味を確認してみよう。

まず、「癩」^{くせ}「癧」^せは、中心の意味としては、

○偏った好み・傾向が習慣になったもの、性質^{注12}

である。それには、偏向性・定着性・個人性の三つの特徴があり、さらに、

○欠点を問題にして批判する。

○胸の中にたまっている思いを言いたい。（『徒然草』の「腹ふくるる思い」に通じる）

○癩癧の病気

が付加されて、「癩癧」という語が用いられていると思われる。

一方、「気質」の方は、

○身分・職業などに相応した特有の類型的な気風

で、身分・職業・年令などと一体のもの、類型的という特徴を持っている。

このように辞書的には両者ともある特有の気風・性質という意味を持っている。しかし、微妙な点ではあるが、「癩癧」が非常に個人的なものであるのに対し、「気質」は相対的で類型的であるという違いが導き出されている。特に、気質物が本来の「気質」の意味からはずれてあるべき姿からの逸脱を描いたものであることは述べたが、その逸脱には背景の存在が大きな意味をもつ。つまり、逸脱の背後に一般的性質・気質があり、その上に立っての逸脱の表現のため、かえって背後の一般的性質すなわち原義の「気質」を浮かび上がらせているのである。だから、気質物には読者の意識にある最大公約数的姿が不可欠であることは、ことばとしての「気質」同様相対性を持っていることを表している。

それに対して、「癩癧」は個人的で背景なしにそのままの形で受容できる。というのも「癩癧談」がさまざまな癧を描いたような形となっていて、結局「癩癧」という多義性を持ったことは、秋成個人に集約することになるからである。秋成の病的なまでの癩癧症、自分自身をも批判の対象からはずさない厳しさ、内外に鋭い目を向ける批判精神など、表にあらわれた現象よりも、描き出す側の秋成の内奥を示すものが「癩癧」である。気質物とも共通する逸脱にしても、あくまでも秋成の個人的理想に基づくもので現実存在している性質とは異なる。基準が個人的なため、そこからの逸脱という状況も、さらにそれを逸脱であるとする判断姿勢も秋成個人のものといえる。

このように、秋成が自己の内面に確固として築いている個人的意識は、第二十五段のところで触れられている屈原の意識に通ずるものである。自己の分身である隠棲者を屈原になぞらえているのならば、秋成ともオーバーラップしている。世の中が間違っている、汚れている、それに対して自分は一人正しいという自負、しかしそれでは生きにくいという思いを抱きながらもわが道を行くという意識がそれである。このジレンマが「癩癧」に多くの意味を加え、ますます自分自身の内奥に入り込んでいったゆえんであろう。

それこそ、最も根源にある病的に近いまでに研ぎ澄まされた秋成の感性である。あくまでも純粹で傷つきやすいために多くの誤解を受け、不利なこともあったにちがいない。この鋭い感性によって世相のさまざまな矛盾を敏感にかぎ分け、無知と達観との間に苦悩を強いられる。また、世間への不満を抱き、それによって疎外され、さらに世間に敵対するという悪循環を繰り返して自身の活躍の場を狭めていく葛藤も、感性の鋭敏さに起因する。この感性こそ、「癩癧」の本質であり、すべての出発点である。

結び

秋成という人物はその出生の不詳な点や痘瘡による手指の不具などから、暗くひねくれた秋成像が形成されていた。確かに、妥協して要領よく世の中をわたっていくことができなかったため、晩年は貧困に悩まされたようである。そのときも、心配した友人に和歌の指導を勧められたのに対し、きっぱりとことわった話が「胆大小心録」に見える。^{注13}しかし、このような頑固で偏屈な老人である秋成の、一本筋の通った心の純粹性を理解し、同情されることを嫌う彼の気持ちを察して、友人達は遠くから暖かく見守っていたらしい。^{注14}秋成の暗く歪んだイメージの陰に、繊細で純粹な内面があることは、「癩癧」の意味を一つずつ考えてきても浮か

び上がってきたことである。

秋成の鋭い感性に根ざした「癩癧」は実に多くの意味を持ち、かつその示すところは深いものがある。これは秋成の精神が複雑にいきなり、屈折しているからであろう。たとえば、先に述べた鳥瞰と至近の二重構造のように矛盾するものが見事におさまるところに、秋成の精神の不思議さがある。「癩癧談」において、「癩癧」は非常に深い厚みを持った語であり、その意義の発掘がとりもなおさず秋成精神の明確化への道であると思う。

注

注1 中村幸彦「癩癧談に描かれた人々」(大谷篤蔵編『近世大阪藝文叢談』大阪藝文會 昭和48)

注2 「甲南国文」10 昭和38

注3 高田 衛『上田秋成年譜考説』(明善堂書店 昭和39)

「文化元年(一八〇四)。十月、この年までに、「曉時雨」を書いた。」の項による。

注4 成立年時は確定していないが、文化元年(一八〇四)、十月ごろまでに書かれたとされている。「癩癧談」の執筆より十余年後の作である。

注5 森山重雄『上田秋成初期浮世草子評釈』(国書刊行会 昭和52)

注6 「癩癧談」の成立後、写本の形式で流布していた頃、友人森川竹窓が「癩癧談」を読後写本を作り、原本を秋成に返した時の手紙

である。「癩癧談」の冒頭に収録。

注7 注1に同じ。

注8 「国語国文」昭和38・1

注9 「国語国文」昭和38・6

注10 中村幸彦・水野稔編『秋成・馬琴』(鑑賞日本古典文学第35巻 角川書店 昭和52)

注11 注1に同じ。

注12 以下、語義は『日本国語大辞典』(小学館)、字義は諸橋轍次『大漢和辞典』(大修館書店)を参考にした。

注13 中村幸彦校注『上田秋成集』(日本古典文学大系56 岩波書店 昭和34)の「胆大小心録」二の項による。

注14 注8に同じ。

本文の引用は、古典文庫『書初機嫌海 附くせ物かたり』(文政五年板刊本の複製)による。

(付記)

本稿の作成にあたって、長島弘明先生に御指導いただきました。ここに深く感謝いたします。

(昭五八 日文卒)